

2022 IAPBT ワルシャワ大会ではグストー3世の孫娘 Judyta Fibiger (ジュディス・フィビガー) 監督・制作による映画「ピアノの魂」が上映されました。

“私らは 皆 フィビガーの子供”

他人の成功を何より喜んだグストー3世。ポーランドのピアノ技術者を、生涯かけて育てた信念の歴史。

大国に挟まれたポーランドは割譲、国境線の変更など翻弄された歴史があり、三代にわたりカリシュでピアノを造り続け、人々に誇りをもたらしたアーノルド・フィビガー家の実話である。

「Calisia」 Arnold Fibiger (アーノルド フィビガー)

1873年、カリシュに自分の工房を開き、1878年に最初のピアノを製作。1939年には 20,000台を超えるピアノを製造。パリやロンドンで開催された万国博覧会などに出品し、受賞した作品も数多くある。

1914年、第一次世界大戦勃発後、カリシュはドイツ軍に爆撃され、アーノルドフィビガーの工場も大きな被害を受け、ベッティングの工場は完全に破壊されるものの、1920年代後半と30年代の終わりの好景気に伴い生産を拡大した。

第二次世界大戦が始まると、カリシュは、再び破壊と破滅をもたらされたが、終戦後、新しい経済的および政治的状况の中で、1947年 最初のピアノが製造された。その後、Fibiger の会社は国有化 (1948年) され、Calisia に変更。

フィビガー家の最後の一人であるグストー・アーノルド3世は、戦後、取締役になり、1953年以来、かつて彼の家族が所有していた工場の総合製造責任者になり、ほとんどのピアノのモデルを設計。

その後、フィビガーはピアノ製造技術学校を設立し、1955年から 1964年まで監督を務めた。カリシアは、ポーランドにある 2つのピアノ製造業者のうちの 1つ。(Calisia 2007年 生産停止)

(The UK Piano より一部抜粋して掲載)